

---

# ISブレイク

タナトス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ISブレイク

### 【Nコード】

N8088Y

### 【作者名】

タナトス

### 【あらすじ】

一人の男が『ボーダーブレイク』をプレイし終え、家路に帰る途中、事故にあう。

しかし、男は死ななかった。

これは男がISの世界でボーダーと偽り生きていく事を決断した話さあ、偽りのボーダーよ境界を破壊しろ！！

## プロローグ

一人の男がゲームセンターの自動ドアから鼻歌交じりに出てきた。

歳の頃は20中ごろだろうか。

男はタバコと取り出すとスナップを利かせてタバコをソフトパッケ  
ージから1本上げる。

ソレを口に銜えるとジーパンのポケットからジッポを取り出しなれ  
た手付きで蓋を親指で弾きフリントを擦る。

フリントとウィックが擦れ火花が走り火縄が点火する。

淡いオレンジ色の炎が灯ると男は炎にタバコの先端を近づける。

タバコの葉と巻紙が焼ける匂いが男の鼻腔を擦る。

男はこの瞬間が堪らないと言わんばかりに肺一杯にソレを吸い込  
んだ。

「…………ふ……………」

男は吸い込んだ紫煙を吐き出しながらジッポの蓋を閉じポケットの  
中にソレを仕舞う。

「いや~~~~~ボーダーブレイクの後の一服は格別だね~~~~」

男はそう言いながら玄関先にある灰皿に灰を落としながらそう呟いた。

「それに苦節10ヶ月でようやくとB1……社会人で仕事しながらだからだからな……」

彼は入社2年目の社員だ。勤め先は中企業で給料もそんなに良い訳ではない。

彼は家賃、光熱費、食費と貯金とタバコ代と車の維持費を除けた金額、35000円でこのゲームをプレイしていた。

文字道理、財布がボーダーブレイクしそうな勢いだ。

ただ、溜めた貯金を切り崩さないだけ廃人よりはマシと言うレベルだろう。

「諭吉大先生がギガノト流弾砲喰らったみたいに吹っ飛ばす姿は切ないぜ……」

ボヤきながら男は鬱屈した気分を振り払うが如く吸い込んだ紫煙を思いつきり吐き出した。

暫くタバコを楽しんだ男は吸殻を灰皿に放り込むとパーキングに止めていた愛車の所まで歩く。

「さて……帰ってメシ作るか……」

男がボヤきながらインテリジェンスキーのボタンを押して愛車の口

ツクを解除すると突如としてスキル音が男の耳に飛び込んできた。

「何だ？」

男がそうボヤいた時には時既に遅かった。

男の目の前に大型ダンプカーのボンネットが見えていた。

ISブレイク 1話 『境界を飛び越えた男』

ここはIS学園、IS、『インフィニット・ストラトス』と言うパワードスーツの操縦者及び整備士、管制官、開発者を育てる高等学校である。

湾岸エリア直ぐ近くに場所を構え、その広さはカナリ広大な土地を有している。

その職員室に2人の女性が向かい合って話していた。

一人は黒髪をポニーテールに束ねた目付きが鋭い美女、もう一人は緑髪のショートヘアでメガネをかけた物腰穏やかな女性だ。

この二人に共通点があるとするならばこのIS学園の教師でスタイル抜群の美女と言った所だろうか。

緑髪の女性、山田 真耶が黒髪の女性、織斑 千冬に語りかけた。

「しかし、驚きましょ。あのニュース」

真耶の言葉に千冬は思う所があるのか曖昧に返事を返した。  
はっきり言えば彼女らしくない。

「ああ、例の……」

それに気付かず真耶は話を続ける。

「まさか男性でISを動かせるなんて。しかもソレが織斑先生の弟さんだなんて」

その言葉に千冬は弟の織斑 一夏の顔を思い出す。

そんな時だった。

突如として振動が窓を揺らす。

「「な!？」」

2人がそう言った瞬間、校内にアナウンスが流れる。

『第3アリーナに侵入者あり! 待機中の担当職員は直ちに現場に向かわれたし』

その放送を聴くが早い千冬は真耶に告げる。

「山田先生! ここから我々が近い。行きましょう」

「了解です」

そう言うと彼女達は窓から飛び降りISを装着し空へと飛び上がった。

二人が到着した時、二人は我が目を疑った。

約5、6メートルのスノーホワイトに塗装され、左肩には三日月に『砲』と言うエンブレムがあらわれたロボットがアリーナ中央に大の字になった状態で寝転んでいた。

真耶はソレを見ながら啞然とする。

「な、何なんですか！？ コレ！？」

驚きながらも真耶はラファールのライフルを油断無く構える。

「解りません……唯言える事は我々の知らない未知のロボットと言った所でしょうか……」

千冬も困惑を何とか隠しながら真耶の疑問に何とか答える。

しかし、困惑の中にあっても彼女は打鉄の日本刀型ブレードを油断無く構える。

何せ相手のロボットの右手には戦闘機に搭載するような大きさのガトリング砲が握られていた。

見た目は損傷らしい損傷が無い事からも油断できない。

幾ら世界最強の兵器と銘打つISでも攻撃を受け続ければシールドエネルギーがエンプティーとなり使用不能になる。

未知の敵となるかもしれないモノに油断を持ち込む程彼女達は甘く



ないのだ。

背中にも何やら物騒な代物がありそうだ。

彼女達が油断無く近付こうとした時だった。

突如、ロボットが発行する。

「ッ！？」

二人は大急ぎでロボットから距離を取る。

光が晴れ渡り突如としてショートヘアの男が姿を現す。

「な！？」

二人は何が何やら解らないままそう唸った。

いや、この場合、唸るしかなかったという方が正しい。

「ろ、ロボットが男性に……」

真耶の唾然とした呟きに千冬が如何したものかと頭を抱えるのだっ  
た。

ISブレイク 2話 『偽りのポーター世界に立つ』

男が目を覚めたのは保健室だった。

「知らない天井だ……」

どうやらボケる余力はあつたらしい。

しかし、男が自分が事故った事を思い出すと上半身が跳ね起きる。

「そくだー！ 俺は事故つて……と言つ事はここは病院……？ どうやら助かったみたいだ……」

そう言いながらも男はふと不思議に思った。

そう、事故に遭つたにしては自分の体から痛みらしい痛みが感じられない。

「可らしいぞ……何で俺の体が無事なんだ？ 相手はダンプカーだぞ！？ ミンチより酷い状況でも可笑しくないのに……」

そう言いながら男は自分の上半身を触る。

「な！？ 何じゃこりゃ~~~~~」

男はそう叫びながら自分の着ている服を見た。

そう、服装は何とボーダーが身に付けるパイロットスーツの様なものだった。

男は慌てて当たりを見回す。

其処に備え付けの流しと鏡があった。

男は大急ぎで鏡を見ると啞然とした。

其処には自分の顔と違う別人が写っていたのだから。

一方、千冬と真耶は男の持ち物を検めていた。

物品は携帯電話の様なこの世界の常識から考えられないハイテクな端末とタバコとライター、そしてIDカードと腕時計だった。

「何ですかね……これ……」

真耶の困惑交じりの疑問に千冬が答える。

「タバコとライターは兎も角……この携帯端末とカード、そして腕時計……さて、どん物やら」

千冬言葉を他所に技術科の女性教員が悲鳴を上げた。

「そんな馬鹿な!？ この腕時計……ISだと言っの!？」

その叫びに千冬と真耶が反応した。

「何だと……」

千冬は何か自身の驚きを整理してそう言った。

真耶はやはり驚きを隠せない。

そして、調査が進むにつれ端末とカードの使い方が判明したのだった。

男は何とか心を落ち着かせると現状を理解する為に部屋を見回す。

（何て事は無い。何処にでもあるような医務室だ……戸棚には消毒液やら包帯やらガーゼやらが置いてある。問題は出入り口の扉に鍵がかかっている出られない。窓も見たけどざっと3階位の高さ……飛び降りたらよくて骨折だな……）

そんな事を考えていると突如、扉が開いた。

男は扉の方を見やりながら身構えた。

「ああ、目が覚めたのか？ 丁度良かった。お前に聞きたい事がある」

千冬がそう言いながら男の所まで歩み寄る。

(何て美人なんだ……スタイルもいい……しかし、雰囲気は力ナリ鋭いな……町でいたらナンパしたくても出来ないよ……)

そんな事を思っている事を知ってか知らずか千冬は男に自己紹介をした。

「私は織斑 千冬。IS学園で教鞭をとる者だ」

その言葉に男は内心驚いた。

(織斑……千冬……だと!? それにIS学園!? んじゃ何か!? ここはインフィニット・ストラトスの世界か!? そんな馬鹿な!? ライトノベルのお話の世界に俺は迷い込んだのか!? S Sでよくある転生しちゃった とかそんな状況か!? 俺は!?)

はつきり言って混乱の極みにある男に千冬はこう言った。

『ジン・キサラギ、ボーダーIDxxxxx12、ボーダークラスB1・通り名は鮮やかなる戦士、ニユード耐性細胞、通称ボーダーの保有者であり、最大手PMC、マグメル所属の派兵社員でブラスト・ランナー、通称、ブラストの操縦者、搭乗ブラストは、ヘッドはクーガー?型、ボディーはエンフォーサー?型、アームとレッグはケーファー42、機体ペイントはオールスノーホワイト、武装はメインがGAXエレファント、サブがサワードロケット、補助武装は試験型ECMグレネード、特殊兵装がバリアユニットといったな重火力兵装だな……』

男は啞然とした。

いつの間にもやら男はボーダーなんかになっていた。

少なくとも目の前の千冬は男を傭兵と勘違いしている様だ。

（何でボーダーブレイクの事やブラストや俺の通り名を知ってんだ！？ いや、そんな事より如何する！？ こんな状況で俺、実は一般のサラリーマンですなんて言えないよ……それになんか知らんがこれ以上事態が悪くなる。下手したら変な施設に入れられて一生堀の中かもしれない……こうなったら生き残る為にウソを付くしかないのか……）

男は観念するような演技をして千冬に語りかけた。

「……どうして俺の素性を……マグメルのセキュリティは完璧な筈だ。たかがB1のランカー風情とは言え正規の派兵社員だ。個人情報も顧客との取引が完了してマグメルが派兵定員を決めてからそこで初めて社員の情報が開示される筈だ。しかも、得意先の2社のセキュリティも完璧な筈……それにたかがB1ランカーの傭兵の事など気にも留めない。最低でもAクラス以上でないと誰も関心を示さない。この家業を始めて10ヶ月になるが其処まで有名になった覚えは無い。何故、俺の名と機体を？」

その言葉に千冬は無言で携帯端末とIDカードを取り出した。

「この端末にカードをスロットして解った事だ。お前の戦歴や機体状況までしるされていた」

その言葉に男は身構えながら問いかける。

「何が目的だ？」

男の問い掛けに千冬は答える。

「君の持ち物の中からISが発見されたソレもコアナンバーが無い  
ノーナンバーのISだ」

その瞬間、男は内心驚いた。

(何の冗談だ！？ ISだと……)

男は内心驚きながらも知らないフリをして質問した。

「話が見えない……そもそもISとは何だ？」

その質問に千冬が答える。

『インフィニット・ストラトス』通称IS、篠ノ之 東が開発した  
マルチフォーマルスーツで元々は宇宙進出の為に開発されたがその  
兵器的側面は旧世代兵器を遥かに凌駕し世界最強の機動兵器の座を  
欲しいままにした。

しかし、このISは大きな欠点があったソレは女にしか扱えない兵  
器であると言う事だ。

何時しか世界は女尊男卑の世の中となった。

そして、今この場所はそのISのパイロットを育成する機関、IS  
学園の保健室である事も把握した。

取り敢えずのあらましを聞いた男は質問する。

「どつやら俺は別の世界とやらに来たみたいだ……しかもISを持つて……状況は理解した。で、貴女は、いや、貴女の後ろにいる人間、多分政府機関だろうが俺に何をさせたい？」

「お前にやって貰いたい事はお前が持っていたISの機動試験とその調査とIS学園生徒として学園に通ってもらおう」

ソレを聞いた男はまた問う。

「報酬は？」

「君の衣食住の確保及び、日本政府による身分証明の発行。ISの最新開発情報の一部開示と調査協力費として月50万円の支払いと特別依頼手当が別途支給となる。質問は？」

「特別依頼の内容とその資金の上限は？」

「依頼内容によって君が判断し報酬を決められる」

その言葉に男は皮肉る。

「たかがB1風情に過度な期待だな……まあ、モルモットにされる慰謝料と思えば足りないか？ それとも身分と衣食住を保障してやるから感謝しろと？」

その言葉に千冬は表情を崩さずに言い放つ。

「中々辛辣だな。まあいい。返答は？」

その言葉に男は更に皮肉を言う。



「コレだけ待遇がいい依頼はそう無いからな。まあ、最も、俺の意見などあって無きが如しだからな……良いだろうその依頼了承した。契約書は24時間以内に作成して貴女とここの責任者のサインを貰おうか。勿論、公文書として残る形でだ」

千冬は肩を竦めながら溜息を吐きながら言う。

「ずいぶんと用心深いのだな」

男は鼻を鳴らしながら言う。

「俺の生命線だ。反故されては堪らないからな」

こうして、男改めジン・キサラギは異なる世界に立った。

## ISブレイク 機体説明

主人公機

重火力プラスト (仮)

兵装

GAXエレファント

GAXガトリングガンの派生型で、3連の大口徑銃身が特徴。通称「象」

秒間約13発。瞬間火力4933、マガジン総火力88800。0Hまで掃射したときの総火力は27380。最大射撃可能時間18秒(1マガジン)

概要

連射性能と装弾数を犠牲にした代わりに連射精度と威力が大幅に向上した破壊力重視型ガトリングガン

サワードロケット

総火力：44000。1mあたり880dmg減衰。  
ダメージ装甲効果：大破D+（ - 1.38m）、ダウンHG  
A+（ - 4.82m）、ノックバックALL（4.97 - 7.  
4m）

#### 概要

重火力兵装副武器の初期装備。

胴体中央を精確に捉えた直撃ならば平均装甲D+より低い機体であれば大破・フルHG3のA+、以外は吹き飛ばせる火力に、程よい広さの爆風範囲と使い勝手が良い。

リロードも速く重量も軽いので、後で作れるサワード系と比べても決して劣らない性能で、バランスの取れた汎用性の高さが魅力の一品。

5発という余裕ある弾数や、サワード系の中でも高めの弾速とリロードで安心感がある。

#### 試験型ECMグレネード

起爆までの時間は 約0.5秒で、ジャミング効果の持続時間は約3.5秒。

#### 概要

ECMはElectronic Counter Measure  
sの略で電子妨害兵器である。  
ジャミング

初期型に比べ効果時間が短く、ジャミングの程度はやや弱い、効果範囲が広く、起爆時間も非常に短いのが特長。

バリアユニット

バリアユニット系統の初期型。

概要

照準方向前面 に半球状のバリアを展開する。バリア展開位置から見て側面や裏からの攻撃は防御不可。上下に照準を動かせば、バリアの展開位置も上下に動く。

ISブレイク 3話 『その名は白月(しらづき)』

ジンはIS学園の第2アリーナの管制室にいた。

何故この様な所にいるかと言えば、千冬が連れて来たからに他ならない。

「今回、お前が行う事はお前が持っていたISの起動試験だ。内容はISの展開のIS機動試験をやってもらおう。大まかな内容はISの基本操作の完熟と兵装確認及び簡単な模擬戦だ。質問は？」

その問い掛けにジンは完結的に答えるだけだった。

千冬から渡された腕時計を左手首に巻きつけると千冬はソレを確認して言う。

「ISは今待機状態にある。お前が念じればISは装着される」

(ああ、そう言えば一夏も筈もそんな事してたっけか……)

ジンはそう思いながら瞳を閉じて左手を前に掲げた。

その瞬間、ジンの体が光に包まれる。

脚部パーツ、ボディーパーツ、腕部パーツ、そして頭部パーツが一瞬で装着された。

千冬はIS装着が完了したのを見ながら感心して呟いた。

「まさか、ISを知らない素人が行き成り1秒以内にISを稼働出来るとは思わなかった」

ジンは別段気にする素振りを見せずに千冬に問うた。

「ISは機動した。この次は？」

A C C E S S

機械の音声と共にジンの目の前に次々とウィンドーが展開していく。

また新たなウィンドーが開きある画面を表示する。

『シールドエネルギー現容量、5300』

ソレを見た千冬が驚きの声を上げる。

「何と言うシールドエネルギー蓄積量だ……」

確かに言われてみれば確か一夏の白式はアニメでは4000チョットだったはず。

ソレを鑑みれば確かに破格のエネルギーだ。

千冬は気を取り直してジんに語りかける。

「どうだ？ 違和感は無いか？」

「なんとも無い。いや、まるでコイツから語りかけてくるようだ……」

その時だった、ウィンドーとタッチパネル式キーボードが目の前に浮かび上がったのは。

この機体の名前を入力してください

ジンは暫く考えた後、自分のエンブレムを見てこの機体の名前を打ち込んだ。

白月しらつき

と……

今度は歩いてカタパルトまで進むよう指示する。

ジンは難無く歩行してカタパルトに脚部ユニットを固定させた。

この行動に千冬は内心戦慄した。

（馬鹿な……！？ ISを起動して数分だぞ！？ ソレが何でこんな簡単に完璧な歩行が行えるんだ！？ それにカタパルト固定シークエンスを無意識レベルで行っていた……）

千冬は驚いているがジンからすれば何をとと思った。

ISとは早い話がイメージインターフェイスで動いている。

プラストを動かす感じで動かせば簡単に動く。

早い話が思い込めばいいのだ。

自分の体と同じで。

ソレを意識的に行うか無意識で行うかの違いだ。

と、ジンは思っていた。

実際、ソレをヤレと言われて実際にやれる人間は少ないだろう。

しかし、ジンはロボットモノアニメや漫画を腐るほど見てきている。

そのイメージがごびり付いているからこそ簡単に出来た。

ソレを知らない千冬はただただ驚くしかなかった。

(問題は、俺の体がイメージ通りに動くかどうかの問題だろうな…  
…肉体とイメージの不一致が起こるとも限らない。歩く程度の動作  
なら問題は無いんだらうけど)

そう、ジンは其処だけが心配だった。

老人を例にして例えるなら精神は若いつもりでも肉体は年と同じと  
言う状況で体を動かし、転倒する事がある。

それと同じ事がジンにも言える。



最も、この体のスペックの最高値や限界が何処にあるのかすらつかめないでは把握のしようが無い。

(どちらにしるぶっつけ本番か……)

肉体で見るなら前の自分より遥かに優れたスペックだろう。

前の自分はこんなに容姿がいい訳でも腹筋が6つに割れているわけも無い。

更に戦いに関係する知識が湧き上がる事など無かった。

(どうやら不一致は精神と知識にもあるらしいな……)

不思議な感覚である。

例えるなら本で読んだ知識がそのまま脳味噌にデータとして存在し、感情がそれを読んでいると言った状況だ。

(成る程……だから表情が硬いのはそのためか……そのお陰で織斑先生にはばれなかったから不幸中の幸いだな)

そんな事を考えていると千冬から激が跳ぶ。

『何時まで其処にいるつもりだ？ 早く出る』

そんな無茶なと心で思いながらもジンはこっいつてカタパルトを起動した。

「白月起動！ 出るぞー！！」

こうして偽りのボーダーは空へと押し出された。

(押し出されたはいいけど空を飛ぶ感覚がわからない……フワジャ  
ンで浮き続ける感じか？ 色々と消費が激しそうだ……そう考える  
一夏すげ〜な。初手つぱちで行き成り空を飛んだんだから……ん〜  
〜が空を飛ぶ感じか？)

そう思った瞬間、白月は空を滑るように上空へと舞い上がった。

まるで重力など其処に存在しないかのごとく。

さしもの千冬もこの状況は理解の外だった。

(そんな馬鹿な！？ IS操縦数分であんな滑らかな飛行が可能だ  
と！？ 確かにPICを使えば可能だが……ソレをこの男は知識も  
無しにソレをやるだ！？)

驚いたのは千冬だけではないジン自身も驚いていた。

(うっそ〜ん……こんな簡単でいいのか？ しかも止まれと思っ  
たら上空で止まっちゃったよ……もしかして重力が存在しないのか  
？ なら……試してみる価値はあるな……)

そう言ってジンは急速に直進する。

そして、左右の腕を超高速で振るうと同時に体を捻り左右の足も振  
るう。

そうするとPICを使わずとも速度を落とす事無く急速に白月はそ

の向きを逆方向に変換して同じ速度で飛んでいく。

(アンバックが出来るのか!?)

その行動に千冬は啞然とした。

(何だ!? 今の移動は!? 通常ISの起動変更は反対方向にPICを起動するか大回りで反転するのが普通だ……ソレを大回りするどころかPICを使わずに体の動きだけで機体の向きを変えるばかりか起動補正すら行っただと!?)

其処に思い至った時、千冬は寒気すら覚えた。

(これを実戦の場で使うとまるで隙が無い。理にかなった起動だ……確かキサラギのクラスはB1だった。最低でもA5からSS1まで15ランクがあるのだとすれば上位ランカーはどれだけ化物なんだ!?)

千冬は知らないがA1から上は最早神を通り越して変態と言つ名の紳士なのだ。

またの名をボーダー廃人とも呼ばれる。

因みに、SS1のランクイン条件は、

制限時間30分間にメダル10枚集める

勝利・圧勝でメダル1枚

総合順位2位以内でメダル1枚

総合スコア60ptでメダル1枚

と言つ変態鬼条件をクリアした強者にのみ与えられるクラスであり

最早称号の域である。

ジンもそんな人とは会った事が無い。

最早雲の上の存在だ。

余談は兎も角、千冬は武装を試させるべくジンに指示を出した。

『次は武装だ。念じる様に武装を展開しろ』

そう言われジンは想像した。

漢のロマンであり自分が使っていた兵装を。

GAXエレファントを。

ソレを見て千冬は次にターゲットをだした。

『それでターゲットを全て破壊しろ』

そう言われジンはエレファントのトリガーを引き絞る。

モーターが唸りを上げて束ねられた3つの銃身を回転させる。

そして、秒間13発の勢いで弾丸が吐き出される。

僅か数秒ターゲットがボロ雑巾の様にズタズタになった。

(しかし……何て反動だ……まあ、ガト中最高威力は伊達ではない  
みたいだ)

ジンは渋い顔をしながらエレファントをしまつと今度はサワードロケットを取り出し。

残りのターゲットに撃ち込む。

白い白煙が線を描きながら真っ直ぐターゲットに滑り込む。

命中と同時に爆発。近くにあったターゲットすらも吹き飛んだ。

（サワでこの威力かよ!? コング使ったらマジで周囲が吹っ飛ぶぞ!? でもまあ、1発ごとのリロード時間と装弾数もあるからトントンか……）

試験型ECMやバリアも試したかったが相手もない。

そんな時だった。

千冬が模擬戦を行う事を提案したのは。

俺はその誘いに乗った。

ISブレイク 4話 『模擬戦』

アリーナの中央に一組の男女が立っていた。

ISを起動して。

男はその内面が読み取れない無表情で、女は何だか男の表情に怯えてるらしく緊張した面持ちで男を見据えていた。

ジンは向かい合う真耶に頭を下げながら言う。

「山田先生、ご指導の程、宜しくお願いします」

「こ、此方こそ宜しくお願いしますね。キサラギ君」

そう、模擬戦の対戦相手は真耶だった。

『それでは、山田 真耶対ジン・キサラギの模擬戦を始める』

真耶は油断無くラファールのライフルを構える。

そして俺もエレファントを構えた。

向かい合う二人。

『始め!』

その瞬間、2人は高速で動き出す。

真耶の動きにジンは戦慄を覚えた。

（マジかよ！？ 動きに無駄が無いばかりか自分の有効射程の間合いをキッチリ確保しているだ！？）

エレファントを乱射しながらも真耶は巧みに攻撃を回避していく。

そして、隙あらば大口徑ライフルで此方を撃ち抜く。

しかも確実に頭と心臓と言うシールドエネルギー消費が激しい所を狙うのだ。

ジンは直撃を避けながらも何とか喰らい付く。

しかし、真耶も自分の優位な距離を取りながら射撃する。

（クソ！？ やり辛い！！ エレファントだからこつも離れられたら弾がブレちまう。せめてすガトかキツツキだったらこつもならんだろうに）

一方の真耶もその火力に攻め手に欠いていた。

（とんでも火力ですね……それにガトリングの割りに一撃一撃が重たい。シールドエネルギーが削られます。捌き切れない攻撃はバリアを展開してまずけどソレすらガラスの様に碎けます。それにキサラ吉君がいい腕してます。何とか経験と射撃の基本戦術と応用で対処してまずけど、シールドエネルギーが何時無くなるか……ソレが

心配です)

両者拮抗する状態で普段のジンではしない様なミスをしてしまう。

エレファントOH

目の前にウィンドーが開きそう表示された。

「しまった！！ バレルがOHした！！ クソ！！ マジかよ!？」

慌ててジンはサワードロケットを装備した。

これを見た真耶はチャンスと捉える。

(ミスをしましたねキサラギ君。私はそのミスを逃すほど甘くありませんよ?)

そこで真耶は大口径ライフルから小口径サブマシンガンに切り替えて射撃する。

しかし、ジンは微笑んでいた。

(え………?)

その表情に真耶は疑問を持った。

しかし、と振り切りサブマシンガンのトリガーを引き絞る。



放たれた小口径弾丸は1発残らずジン目掛けて殺到した。

しかし、ジンは動かない。

そして……

突如としてジンの目の前で弾丸はすべて弾き返された。

「ウソ!? 何で!?!」

そう、ジンが試していなかった特殊兵装、シールドを展開したのだ。慌てて真耶は大口径ライフルで再度ジンを撃つがソレすら不可視の壁に阻まれる。

動揺する真耶に決定的な隙を見たジンは急接近をかける。

「ッ!?!」

慌てて真耶はグレネードランチャーを数発叩き込むもシールドにより爆発と爆風さえも阻まれた。

「そんな!?!」

更に動揺する真耶に追い討ちを掛けるべくジンは試験型ECMグレネードを真耶に投げ込んだ。

0.5秒でグレネードは爆発。

真耶の周囲に金属片と妨害電波を撒き散らす。

そして突如真耶の目の前にウィンドーが大量に開きその全てのウィンドーが砂嵐を映し出した。  
ハイパーセンサーも砂嵐。  
音声すら雑音。

真耶のラファールは完全にその視力と聴力を寸断された。

「へ!?!」

真耶は啞然となりながらも何とかその状況を打開しようとするがその時にはジンを見失っていた。

「何処!?!」

その言葉と共に背中から爆風と衝撃が叩き付けられる。

「キヤ~~~~~」  
「!?!」

爆風と衝撃で地面に叩き付けられる真耶。

不意打ちだった。

モロに喰らったから絶対防御が発動し、ラファールの4分の3のシールドエネルギーを持っていかれた。

地面に叩きつけられそうな所で何とかPICを展開し激突だけは避けた。

しかし、突如、ロックオン警告が真耶の耳に飛び込んできた。

「え？ 左！？」

その時振り向いた真耶の目に飛び込んできたのは銃身を回転させているエレファントを持ったジンだった。

長大なマズルフラッシュが真耶の視界を覆い隠し、無数の衝撃が真耶を襲った。

『それまで！！ 山田機シールドエンプティーによりキサラギ機の勝利』

そのアナウンスと共に模擬戦は終了した。

ISブレイク 4話 『模擬戦』（後書き）

EMCは中々如何様臭い性能ですな……

あれやられると気が付いたら自分が撃墜されていると言っているのがザラです。

正に重火の切り札です。

ISブレイク 5話 『更識 楯無』

ジンがこの世界に来て丁度1ヶ月が経過した。

ジンがこの1ヶ月間で行った事は以下の通りだ。

朝6時に起きて周辺をランニングと近くの公園の鉄棒に足を引っ掛けて腹筋、背筋運動を10セットを行う。

それが終わるとシャワーを浴びて朝食を作りソレを経済新聞を読みながら食べ、IS学園に向かう。

今の所、ジンの住まいはIS学園職員寮の空き部屋を借りている。

朝は整備課で白月の整備とISの基本知識の勉強。

ソレが終わったら昼食を取り学園の図書館で予習と復習を行う。

ソレが終わると自主練習と真耶か千冬の空き時間を利用しての模擬戦が講義。

それが終われば部屋に戻り今回習った事を復習。

夕食を作りそれを食べてタバコをベランダで吸ってシャワーを浴びて寝る。

こんな1日を1ヶ月飽きもせず続けた。

しかし、1週間前から視線を感じるようになった。

歩いている時は気配が無いのに人がいるのを感じたり。

図書館にいる時でさえ纏わり付く視線が気になる。

正直、集中できない。

( いい加減鬱陶しいな……正直、限界だ。此方から誘うとするか )

ジンはベットに寝転がりながらそんな事を考えていた。

ジンは図書館に行くのを取りやめIS学園の屋上に上った。

丁度放課後だったらしく誰もいな。

辺りは夕日が差し込み屋上をオレンジ色に染め上げた。

ジンはタバコを懐から取り出しスナップを利かせながら1本取り出しソレを口に銜える。

ズボンのポケットからジッポを取り出し蓋を親指で開けると親指でフリントを回転させる。

オイルの匂いが鼻を擽る。

そして、付いた火をタバコの先端までもっていき火をつけた。

タバコの匂いが鼻腔を擽る。

ジンが一と吸いして紫煙を吐き出すと手摺に持たれかかりながら屋上出入り口に突然語りかけた。

「いい加減、鬱陶しいぞ。幾ら悪意や殺気が無いからと言っても連日コレでは気が滅入る。話がしたい。出てきてはもらえまいか？」

その言葉がジンの口から紡がれて数秒後、昇降口のドアが開いた。

そこから現れたのは水色のショートヘアでこの学園の制服を着た少女が現れた。

青いタイからこの学年の1年であることが解る。

「あら、気が付いてたの？ 何時から？」

底抜けに明るい声が美少女から帰ってきた。

ジンはその声音とは裏腹なものを感じ取っていた。

（何だこの娘！？ 全然隙が無い……しかも気配の消し方も完璧だった……唯、完璧すぎて解り易かったけど……）

ジンは溜息を吐きながら少女の質問に答えた。

「一週間前からだ」

その回答に少女は驚いた顔をした。

「ウソ！？ 開始早々ばれてたの！？」

その回答に驚きに構わずジンは語る。

「で、君は誰だ？ 正直言って気配の隠し方が見事すぎる。明らかにその道のプロだ。スカウトやアサシネーションやエスピオナージなどの」

その言葉に少女ははぐらかしてもこれ以上得るものが無いと思ったかソレを肯定した。

「あら、よく解ったわね。いかにも、私の名前は更識 楯無、IS学園1年にして生徒会長よ。宜しく。ああ、もう2年になるけどね」

その名乗りにジンは納得した。

(成る程、彼女が更識 楯無か……中々狸臭さがする女の子だな……)

「で、何の用だ？ 何も危害を加える積もりが無いのなら俺の身辺調査か？ 正直、1週間調べたんだろ？ それで？ 俺の何が解った？」

ジンは挑むように楯無にそう言った。



楯無は顔は笑顔を作っていたが内心は焦っていた。

(この人出来る……私のスカウトにアツサリ気付いたばかりかISをいつでも緊急展開出来るようにしてる。しかもここは職員室に近い屋上。先生達がいる事を計算し、さらに生徒に危害が及ばない様に放課後の時間を選択した。つまり援軍が期待できて無用な被害が出ないように計算してこの場所を選択したんだ……本当に厄介だわ……)

さらに楯無は観察する。

(それに何この人!? 隙が一分も無いじゃない!!)

「そうね、貴方が世界で2番目にISを起動させたとか、突然日本国籍に登録されたりだとか、あの山田先生に勝ったとか、とんでもない努力家で驕らない所とか、熱心に勉強してるところかな。でも、私が最も評価したいの今の状況かしら」

その言葉にジンは驚くような顔をした。

「ISの操縦者は基本的に個人技能だからこんな集団戦の知識が無いのかと思えば……君はその辺の心得はある様だ。いや、侮るつもりは無かったが……」

ジンとて馬鹿ではない幾らISがあってもソレを有効活用できなければ意味が無い。

ジンのIS操縦技術は精々中の上或いは上の下と言った所だ。真耶に勝てたのは真耶が此方の兵装を完全に把握していなかったからに過ぎない。

明らかに1回限りの奇襲だ。

それ以後の成績は真耶にあしらわれる一方である。

そんなジンが慢心や驕りを抱ける程馬鹿でも無能でもない。そもそも、ボーダーブレイクでの成績はいいほうではない。部屋の人が上手かったから上手くランクを上げれたからに過ぎない。

だからこそ、ジンの戦いは勝てる状況を作る事から始まる。勝てる土台作りと地形の応用、味方との連携こそ大事なのだという事を身に染みて理解していた。

だからこそどんな格下でも油断は持ち込まない。

「だからかな？ 貴方に興味が湧いちゃった」

「興味？」

その楯無の言葉をオウム返しにするジンを見やりながら微笑んで言う。

「そ、だから私と模擬戦して見ない？」

その突然の提案にジンは考える。

(行き成りだな……何が狙いだ？)

「何が狙いだ？」

自分の想いを率直に楯無にジンは問うた。

楯無は微笑みながら答える。

「これ以上調べても貴方からは埃一つ出てこない。なら、IS操縦者が相手を理解するには戦うしかないでしょ？」

その言葉にジンは苦笑した。

「まるで体育界系のノリだな……まあ、嫌いじゃないぜ、そう言うの」

「じゃあ？」

「受けよう？ 正確な日時と時間は？」

その質問に楯無は明日の放課後、場所は第5アリーナで行う事を告げた。

ジンは楯無の勝負に供えて模擬戦を申し込まれた直ぐ後に職員室を訪ねた。

「失礼します」

職員室の出入り口を開いた瞬間、職員室にいた全教員がジンを見つめた。

ジンは目的の人物を見つけ出すと職員達の視線を気にする事無く歩み寄り、開墾一発に千冬に語りかけた。

「今回は前置き無しでお願いします。更識 楯無とその専用ISの詳細データ、及び過去の公式、非公式両方の試合映像をお貸し願いたい」

その言葉に千冬は僅かに眉根を顰め、他の職員はその名とジンの言葉の内容に驚きと言う名のざわめきを職員室に満たした。

「理由を聞こう」

千冬の問い掛けも最もだろう。

ジンは基本的によくアポを取り付ける。

しかし、今日に限ってそのアポも無く、更に前置き無しで行き成り

ロシア代表にして生徒会会長でありIS学園生徒最強と称する楯無のデータを貸せと言って来たのだ。理由の一つでも問いただしたくなる。

ジンはその理由を簡潔的に答えた。

「今日の16時に更識に模擬戦を申しこまれました」

その言葉に千冬の眉根は更に跳ね上がる。

それだけではない。

周りの教師達もざわめきの音量を大きくした。

「ほう……更識に……それで、お前が受けて立ったと……？」

「はい……」

そのジンの肯定に千冬は疑問を投げかけた。

「相手の実力が解らないお前でも無かるうに。相手はそこら辺にいる生徒とは訳が違う。お前と同じ年で国家の看板背負って戦っている歴戦の戦士だ。確かにお前は命の取り合いをしていたかも知れないが、相手は楯無と言う看板とロシア代表と言う看板を背負っている奴だ。その双肩に掛かる重圧は多分、お前が想像している以上だぞ？ それでも奴は笑ってソレを背負いきっている」

そんな奴にお前は勝てる積もりでいるのか？

千冬は語外にそんな意味を込めた。

しかし、ジンは静かにだがはっきりと答えた。

「俺は傭兵です。背負うべきは自分の行った戦闘による評価とその報酬だ。全てがランクに振り分けられ、生き残った者だけが勝者としてランクアップできる世界です。悪いですがたかが国家の命運や家の命運を背負っただけで生き残れるなら死んだ人間は全員生き残ってる。俺とて数多の人を殺した身です否定はしません。事実ですから。だが、貴女は勘違いをしている。俺達の世界では負けイコール死だ」

ジンは演技をしつつも自分がここまで演技出来るとは思ってもよらなかった。

そして、見据える。

「貴女は生きる覚悟と死ぬ覚悟の両方をして生きてますか？ 少なくとも俺はその両方の覚悟を持って生きている」

これは演技でも何でも無い。

ジン・キサラギの本心だ。

だからこそジンは死に物狂いで学んだ。

多分彼が前世よりも真剣に生きたかもしれない1ヶ月だった。

何故ならこの世界にとってジンは部外者なのだ。

そう、ジンにとってのISの戦いは自分の生存権を確保する為の戦いなのだ。

だからこそ言える。

「俺にとって敗北は死そのものだ。だからこそ勝つ為に何でもする。ルールがあるならそのルールを最大限に活かして勝ち抜く。だから、お願いします。更識 楯無のデータを貸していただきたい」

其処に綺麗な物は無く。榮譽も名声も勝利に酔いしれる事も力を誇示する事も無い。

生存本能の許す限り勝利と言う名の生を勝ち取る。

ある意味で野生動物の考え方だった。

千冬はその話を聞き覚悟を決めた。

(ここまでこの男は覚悟しているのか？ 成る程な…… 15、6そこらで背負うには重い覚悟だ。成る程…… 生きる為の勝利か…… ある意味単純で最も難しい事にこの男は立ち向かっている訳だ。いいだろう。その覚悟、しっかと受け取った)

「解った。何も言つまり。敗北したら多分更識はお前の事を根掘り葉掘り聞いてくるぞ。それなりの覚悟があるなら何も言わん」

そついい、千冬はパソコンを操作し資料閲覧室の許可書を発行した。

一方、楯無は生徒会室で布仏 虚と話していた。

「以下の資料がジン・キサラギのIS、白月のデータです」

「……成る程ね、機体は鈍重だけどふざけた火力ね……それにこのバリアとECMが厄介ね……何せ、シールドエネルギー無消費で飛び道具が全然きかないもん。さらにこのECMはISのハイパーセンサーを短時間とはいえジャミング出来るなんて……」

楯無はその資料を読みながら呟くように言う。

「でも、まあ、接近戦に持ち込めば有効打は期待出来るでしょ……  
まあ、それはアチラも計算してるだろうし」

その言葉に虚は言う。

「それにお嬢様のISには清き情熱クリア・パッションが御座いますからそれ程苦戦するとは思いませんけど？」

その虚の質問に楯無は鼻で笑う。

「ハン、相手は山田先生に勝てる相手よ？ 記録も見たけどあの織斑先生がかなり本気出す相手に余裕は見せないわよ」

だからこそ、そうだからこそ本気で戦える。

彼女は心躍った。

今回、例え自分が勝ってもジンの素性を根掘り聞く積もりは更々無い。



ただ、純粹に、同世代と、しかも自分が全力を出して戦える同世代とめぐり合えたのだ。

天才である彼女がそんな心ときめく時間に無粋な物を持ち込ませたくない。

純粹な技量と戦術で彼に勝つ。

ああ、何て良いんだろうか。

こんな心ときめいたのは何時ぐらいだったろうか？

胸が早鐘の様に高鳴る。

肌があわ立つ。

その様子を見ていた虚が呟く。

「まるで今のお嬢様は恋をしてる様ですよ？」  
と。

そして、時は流れ次の日の放課後。

ジンが到着した時には既に楯無がISを起動して立っていた。

「すまない。待たせたみたいだ」

そのジンの陳謝に楯無は苦笑で答えた。

「意外と律儀ね？ 呼びつけたのは此方だから別に構わないわよ？」

そう言うと楯無は普段とは違う気配を放つ。

そう闘気だ。

「ISを展開しなさい。始めるわよ」

ジンも闘気を放つ。

「解った」

短く答えたジンは左腕を高く掲げ目を瞑る。

その瞬間、ジンは光に包まれ僅か0・1秒でISを装着した。

そしてその右腕にはエレファントが握られていた。

「さあ、始めようぜ」

ジンの言葉と共にガトリングを構える。

楯無も蒼流旋を展開する。

特殊ナノマシンによって水のランスが形成される。

「ええ、そうね」

楯無は蒼流旋の先端をジンに傾けながらジンを正眼に見据えた。

そして、両者暫くののらみ合いが続いた数秒。

当人達にはその数秒が刹那の出来事にも那由他の彼方にも感じられ  
た。

「ッ!?」

二人は突如、申し合わせた様に同時に動き出す。

楯無は蒼流旋に搭載されているガトリングを乱射しながらイグニツ  
ションブーストをしてジンに迫る。

しかし、ジンはここで楯無の予測よりも斜め上の事をした。

シールドを展開し、イグニツションブーストで後方に逃げ、シール  
ドを消し、ガトリングを掃射した。

これにはさしもの楯無も驚きを隠せない。

(ウソ!? ISを起動して1ヶ月とチョットでイグニツションブ  
ースト!?信じられない!? ソレにガトリングのタイムラグが  
全然無いじゃない!? まさか!? イグニツションブーストで逃  
げる前にバリアを展開しつつトリガーを引いてたの!?)

そう、イグニツションブースト 瞬時加速とはISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、  
その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣  
性エネルギーをして爆発的に加速すると言つ“高等戦闘技術”なの  
だ。

代表候補生でも出来ない者も珍しくないこの高等技能をこの男は I S 稼動 1ヶ月と数日でマスターしているのだ。

楯無の驚きも頷ける。

一方のジンも驚いていた。

（良かった……何とか間に合った。正直、不安だったが訓練した甲斐があったな）

そう思いながらジンはバリアを解いてイグニッションブーストを解除し、通常の P I C に変更、楯無の側面に移動しながら攻撃を続けた。

楯無は若干焦っていた。

（山田先生や織斑先生との訓練映像を見たけどソレよりも遙かに収弾率が上がってる！？ 確実に頭部や心臓部を狙ってくる。しかも 1 発が強烈だからシールドがガラス細工のように粉々になるわね……）

これには理由がある。

ジンは楯無の全試合を備に観察し、楯無の初手での攻撃の癖や回避の特徴、動きに無駄が無いかを観察。ソレをノートに書き込み、全データを頭に叩き込んだ。

「こんな早い段階で使うなんて!？」

楯無は左右1対のアクアクリスタルからナノマシンを生成し水のマントを作り出し自分を守った。

ジンはこれを予想していたのか今度はガトリングからサワードロケットへと変更しソレを楯無に撃ち込む。

しかし、水のマントは剥がれる気配がしない。

「ウザー！！ お前はクロスボーンのABCマントか！！」

そう叫びながらもジンはサワードを撃ち込むが剥がれる気配が無い。

その時、ジンは疑問に思った。

「何で守ってばかりなんだ？ まさか！？」

その時、ジンの周囲が突如として爆ぜた。

「！？ グガアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

そう、なぜ、楯無が防戦一方を“演じて”いたのか。

それはこの“仕込み”の為だ。

彼女は水のマントを作る傍らでジンの周辺に霧状に形成したナノマシンを大量にばら撒いていた。

ジンは爆発の衝撃をアンバックを使って体制を立て直す。

（やられた！！ 一本調子で戦いを運びすぎた。残りシールドエネ

ルギーを3分の2も持つていかれた。クソ！！忘れてたぜ……あの女が狸だった事を……）

一方の楯無も追撃体勢を取ろうとしたがジンの体勢の立て直しの速さに舌を巻いた。

「ウソ！？ もう体勢を立て直した！？ 速過ぎない！？ それに何あれ！？ 手足を使っただけであんな簡単に体勢を立て直せるの！？ 何て人！！」

ジンと楯無はお互い正面に立つ。

ジンは楯無を見据えながら考える。

（クソ！！ 如何する！？ シールドエネルギーが後僅かだ……後が無い）

楯無もまたジンを見据えながら考える。

（参ったな……今のでシールドエネルギーをかなり持つていかれたわね……）

そしてお互い見据えて思う。

（（コレが最後になる。勝つのは俺だ（私よ）（）

しかし、ジンは考える。

（相手にはエースかキング並の切り札がある。しかし、俺出せる手札はそんなに無い……クソ！？ 勝ちてえ！！）

そんな時だった。

ジンの頭の中に声が響く。

『勝ちたいか？ ここで負けてもお前は何も失わない。精々偽りの情報が漏れるだけだろう？ それでも勝ちたいか？』

その問い掛けにジンははっきりと答える。

（当たり前だ！！ 俺は確かに偽りだ。嘘ばかりだ。でもな、それでも俺は真実を墓穴まで持つていくつもりだ。嘘をつくってのはそれだけ重いんだ。それに俺はこの世界で生きていくと決めた。なら！！ 突き通すしかないだろ！！ その嘘を抱いて生きる覚悟も死ぬ覚悟もしてんだよ！！）

『嘘を抱いて生きる覚悟と死ぬ覚悟か…… お前みたいな大嘘付きの馬鹿野郎は見た事が無い』

（解ってるよ…… 俺は嘘吐きで大馬鹿野郎さ。でも、嘘吐きで大馬鹿野郎なりにもチンケでささやかなプライドがあるんだよ！！）

『面白い。実に面白い。付き合ってやるよ。お前の人生を賭けた大嘘に』

頭にそんな言葉が浮かんだ時、ジンの目の前に画面が展開する。

『ワンオフアヒリテイー  
単一使用能力 月光天照発動』

と。

楯無は目の前の状況が理解できなかった。

それは突然ジンの目の前にウィンドーが開いたかと思えば、行き成りジンが白い光を発光させたのだ。

「まさか……ワンオフアビリティー……信じられない……それに至れるIS操縦者は限られているのに……」

いよいよ楯無は覚悟を決めた。

「貴方がワンオフアビリティーで立ち向かうなら此方も覚悟を決めるわ」

そう言いながら楯無は蒼流旋を天に掲げる。

「貴方の覚悟に私はこのミストルティンの槍で答える!!」

ジンはガトリングを構える。

「さあ!! コレで最後!!」

そう言うと楯無はその槍を掲げてジンに突撃した。

ジンはガトリングのトリガーを引き絞る。



ガトリングは0・1秒で弾をばら撒く。

しかもその威力が尋常ではない。

音速を遥かに超えた白い光の弾丸の群れが楯無を襲ったのだ。

そう、それはさながら月光が天を照らすかの如く。

ミストルテインの槍にぶつかる月光の弾丸。

神話のヤドリギの槍と夜空を飾る月光が正面から衝突した時、辺りが爆風に包まれた。

「相打ち……か……」

ジンの言葉に楯無も頂垂れる。

「そうね……」

そう、お互い同時にシールドエネルギーがエンプティイになったのだ。

お互い大の字になってアリーナに寝転ぶ。

一体何時までそうしていただけるのか。

「全く……如何様使ってコレかよ……泣けてくるぜ……」

ジンの愚痴に楯無も愚痴る。

「全くよ……コッチは国家代表よ……ソレが1ヶ月チヨットの素人に引き分けるなんて……泣きそう……」

お互いそう言つと無言のまま星空を眺めた。

「……ねえ？」

「何だよ？」

楯無の呼びかけにジンは憮然とした態度で答えた。

「貴方の事“ジン”って呼んでいい？」

その言葉にジンは目を瞑り一呼吸した後こう答えた。

「良いぜ。その代わり俺もお前の事を“楯無”ってよぶぜ？」

楯無は微笑みながら答える。

「良いわよ」

それからまた無言の時間が続く。

「ねえ？」

「何だ？」

いい加減このやり取りに辟易してきたのかジンの応対はぞんざいになる。

「貴方の事好きになってもいい？」

その言葉にジンの鼓動が跳ね上がった。

「理由は？」

「貴方みたいな努力家で真っ直ぐで馬鹿で強くて弱くて嘔吐きな男の子好きだから」

楯無の理由にジンは無言を貫いた。

「……」

「返事は？」

楯無が返答を急かすからジンは皮肉を込めて言い放った。

「ソレは俺を調査する為か？」

楯無はそんなジンの皮肉に半分怒りながら、そして半分苦笑しながら答える。

「見損なわないで。私は色仕掛けで情報を得ようとは思わないわ。」

ソレは私が諜報員として持つ誇りだから……それに……」

「それに……」

「貴方になら甘えられる気がしたから……更識 楯無と言う一人の女として……」

楯無も色々背負い込んでいる。国家の事、家の事、妹の事、だからだろうか。

そんな重荷を忘れさせてくれるこの男に引かれたのは。

(ああ、私は弱いな……目の前に甘えられる対象に縋ってる……でも、ソレが悪い気がしない……私を更識と言う家の名やロシア代表としてではなく私個人で見てくれる。この人からそんな感じがする)

ジンは一呼吸吸い込む。

そしてこう一言いった。

「いいよ……」

「いいの……?」

「俺も“俺”として甘えられる気がしたから……」

それはジンがジンになる前、一人の何の変哲も無い男だった頃の弱さからの言葉だった。

(ああ、俺の覚悟もこの程度か……散々意地だ誇りだなんて語っても……でも、いいや……俺の誇りと意地と一人くらい大切な何かを

背負っても苦じゃない)

結局、この会話は月と星しか聞いてはいなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8088y/>

---

ISブレイク

2011年11月27日03時21分発行